

小学生ボランティア新聞 ふろく 災害ボラ 気持ちが動いたら

先生方へ
やまびこだより
No.154
今号の特集から

*本紙の特集事例をよりくわしく解説！あわせてご活用ください。

ボランティア活動で大切なことは



災害NGO結代表
前原土武さん

Q.なぜ災害NGO結を始めたのですか？

A.東日本大震災の被災地で、一人のボランティアとして活動

しました。その時、現場でボランティアが活動するためには、事前に色々な準備が必要でした。そして、その準備やボランティアセンターの運営が上手くいくと、一人ひとりの活動が効率良く、沢山の瓦礫が早く片付くと気がつきました。自分一人が99人と一緒に『1』の活動をして100にしかならないけれど、一人が『1.5』の活動ができるような準備をすれば99人でも148.5になるのです。

被災初心者にも上手く運営できるように手助けする人が必要だと考え、活動を始めました。被災地での課題を解決していくには、一人では、一つの団体ではできません。災害ボランティアセンターを運営する社会福祉協議会、行政、NPOなどの連携がとても重要です。それぞれ得意なこと、出来ることが違うので上手く組み合わせ、その隙間を埋めるような動きを心がけています。

災害NGO結は、被災地の情報発信、災害ボランティアセンターの立ち上げ運営、防災、復興イベントなどサポート役（一時つなぎ役）としての活動しています。

Q.ボランティアをする上で大切にしてほしいことは？

A.被災地や被災者によって必要な物が何かを、被災者や被災地の立場になって考えることがとても大切です。相手の目線に立って、その気持ちを大切にすることが【寄り添う】ということだと思っています。

Q.子どもたちにメッセージをお願いします。

A.体力や経験がなくても、道に詳しい人が送迎をする、出歩けないけど電話当番をする、お話し上手な人が訪問調査をする、現地にはいないけど募金活動をする…普段は気づかないけど、被災地のために出来ることは沢山あると考えています。

小中学生だからできないことは、きっとそんなに多くありません。いろんな工夫をすれば実現可能になるかもしれません。大人を上手く使うのは、同じ大人よりも子どもたちの方が上手かも。皆さんだからこそ、できることも沢山あるはずですよ。今どんな問題があるのか、ちょっと想像して、感じて、考えて、誰かと協力して行動に移してもらえれば嬉しいです。

被災地で出会ったエピソード

被災した地域の人たちの思い

上田市 独居のおばあさん

発災から4日が経ち、地元大学生が社会福祉協議会と連携を取りながら、各被災地区の自治会長を訪問し、気になるお宅をお伺いする中で、ご高齢で独居の生活を送られている女性の話が出ました。

お話をするとすぐにお宅に伺うと、「今頃やってきたのか！」と憤りをあらわにしていました。声を震わせながら吐き出した言葉を一つ一つ大学生が受け止めていく中で「こんな目に合うなら、死んでしまえばよかったんじゃないか」とお気持ちを吐露されました。

そこで大学生が「つらかったですよね。苦しいですよ」とお声がけをしていると、次第に女性は涙を流しながら「それでもあなたたちが来てくれて本当に良かった…」と話してくれました。

大学生も「どうか生きてほしいです」とお伝えすると、女性も黙って頷きました。大学生が「また来ますね！」というと、女性は最初とは見違えるほど朗らかな表情で、見えなくなるまで手を振っていました。

長野市穂保 住民の女性

初めてお会いした時に、「こんな風になってしまった地元を見ているのもつらいし、これから住んでいくのもつらい。だから、家は解体して、別のところに引っ越して住もうと思う」とおっしゃっていました。

しかし、連日たくさんボランティアが地域で活躍をして、地域が目に見えて綺麗になっていく風景を見ていた女性が、改めてお宅を訪ねたときに「私の大好きな地域が、もう駄目になってしまったと思っていたけれど、たくさんボランティアさんが来てくれたおかげでまた住みたいと思えました。生きるのが辛くて悲しくて仕方なかったけど、今は少し生きてみようと思えました」と、自宅からの風景を見ながら希望を語ってくれました。

地域が目に見えてきれいになっていきうれしいです。



長野市 災害ボランティアの男性

関西からボランティアに参加した男性が、10日前に活動をしていたお宅に再度訪問をすると「あなたたちボランティアさんが来てくれたおかげで、どうしようもなく途方に暮れてしまっていた人生に光が差したわ。本当にありがとう」と住民の方が感謝の言葉を伝えてくれました。「住民さんがありがとうって言ってくれたから明日からも頑張れる気がした！」と気合に火が付いた様子でした。

協力：災害NGO結、認定NPO法人ICAN、穂保被災者支援チーム、小諸市立東小学校

令和2年3月発行 発行：社会福祉法人長野県社会福祉協議会 まちづくりボランティアセンター
〒380-0928 長野市若里7-1-7 TEL.026-226-1882 FAX.026-228-0130
E-mail vcenter@nsyakyo.or.jp URL http://www.nsyakyo.or.jp/



災害ボラ(災害ボランティア)の活躍

災害ボランティア活動とは？

災害が起きたときに、自発的に行う被災地への支援活動が災害ボランティア活動です。被災した地域や住民が、1日も早く元の生活に戻ることができるようお手伝いします。



避難所での手伝いや炊き出し



家の片づけ・災害ゴミの運び出し



浸水した家や敷地内の泥出し

台風第19号の豪雨災害で、長野県ではのべ70,566人(2019年12月22日時点)の災害ボランティアが活躍し、地域の復旧の支援をしました。

令和元年東日本台風 豪雨災害 長野県で起きたこと

私たちにも できること

長野県でも災害ボランティアが大活躍！

2019年10月12日、日本に上陸した台風第19号は日本各地に大きな爪痕を残しました。長野県にも千曲川の堤防決壊や各地での大規模停電など、過去最大級の被害をもたらしました。

北陸新幹線の車両基地の浸水、高速道路などの通行止め、橋の崩壊、電気・ガス・上下水道などが止まり、日常生活に大きな影響を及ぼしました。特産のリンゴやモモをはじめ、農地も甚大な被害を受けました。

東北信地域の千曲川沿いでは、氾濫した川により浸水被害が数多く発生し、川沿いに住む住民の中には「今まで送っていた普通の生活がたった一晩で変わってしまった」と話す人もいます。

長野市の穂保地区で千曲川の堤防が決壊し、長沼・豊野地域が広く浸水。高い

困っている人を助けたい、何とかしなきゃという思いで来ました。

所では2m近く浸水し、自力で家から逃げられず、自衛隊に救出された方も大勢いました。

普段から防災を意識して、備蓄品を整えるなどしている家庭が増えつつある現代ですが、実際に明日住む家がなくなってしまうかもと考えて普段生活を送っているのでしょうか。「まさか」と思っていることが「まさか」起こるのが災害です。

そんな「まさか」で困っている地域で災害ボランティアが活躍しています。



長野市穂保地区では千曲川の堤防が決壊し、広い範囲に泥流が流れ込みました。



上田市では上田電鉄別所線の鉄橋が崩落

災害ボランティア…思いが集って 令和元年東日本台風 豪雨災害

自分の学びや成長につながるボランティア 被災者に寄り添う気持ちを大切に!!



穂保被災者
支援チーム 代表
太田秋夫さん

Q.なぜ穂保被災者支援チームを立ち上げようと思ったのですか？
 A.一番の動機は「困っている人が目の前にいるんですから“すぐ”に何とかしなきゃ」という思いです。避難所が開設された当初から、ボランティアとして避難してくる被災者の受け入れや避難所の環境を整えること、食事や救援物資の提供、困りごとの相談など、運営のお手伝いをしていました。

しばらくして気づいたのは、避難所へ来ないで自宅や親戚の家に避難している人たちがたくさんいたことです。食事や物資に困っているようでした。「何とかしなきゃ」という気持ちが、一緒に活動していたボランティアの中に広がり、誰言うもなく気持ちが固まり、被災から1週間後には被災地の近くにテントを張って、炊き出しと救援物資の提供を始めました。



Q.活動の中で大切にしていることは？
 A.いろいろな活動があるけれど、それぞれの分野を担う人が指示を受けてやるのではなく、自分で積極的に行動していきます。良いと思ったことは、すぐに行動に移します。みんなの「何かしよう」という気持ちと、みんながうまく「連携」することを大切にしてきました。

Q.ボランティアをする人たちに大切にしてほしいことは？
 A.ボランティア活動って“誰かのためにしてあげる”じゃなくて、自分でできること、やってみたいことを、その活動の対象者と一緒にやることで“自分の学びや成長につながる”ものだと思ってます。それは誰にもできることです。気持ちさえあれば、心の奥底から湧き出て来ようか行動したい」という気持ちが大事だと思います。

もう一つ大事なことは、ボランティアをする時相手の気持ちを察し、自分の気持ちや行動を押し付けてはいけないということです。今回の災害で泥出しボランティアに向けたメッセージが張り出されていたので紹介します。「みなさんが片付けているのは、目の前の泥だけでなく、被災された方々の心の中にまで流れ込んだ泥なのです。被災者に寄り添う気持ちを大切に!!」



現場活動

泥出し・清掃

- 家財の片づけ
- 災害ゴミの運び出し
- 家の中や敷地の清掃

避難所での手伝い

- 炊き出し
- 食事の用意
- 話し相手

被災地の人と交流

いろいろなことを学べる場とも思って活動しています。

笑顔で「ありがとう」と言われると、とても嬉しいです。

少しでも被災した人たちの力になりたい。

穂保被災者支援チームの皆さん
 大きな被害を受けた長野市穂保地区を中心に被災地を支援しているチームです。

物資支援

- 物資の提供
- 物資の整理・配布

それぞれの

思い

思い

× できる

やれる

いろいろな形の 災害ボランティア

思いがあれば
たくさんできる
ことがあるね。



後援活動

募金

情報収集・広報

被災地の物を買う

チャリティイベント

小諸市立 東小学校の活動

炊き出しボランティア ・チャリティー活動

子どもたちの声から

Q.どうしてボランティアをしようと思ったの？
 ● ボランティアっていうのは「自主的」ってことだから自主的に計画し、実行した。
 ● 災害で苦しんでいる人たちが頑張っている中で、あまり災害がなかったところの私たちが長野市の人々の心を見ると助けてあげたいと思ったから行きました。
 ● 大変な時って、どんな形でも助ければ心から嬉しいかなと考えたから行きました。



ありがとう。

お疲れさまです。

元気な子どもたちの顔が みんなを元気にしてくれます

穂保被災者
支援チーム
青木 恵さん



Q.どうして炊き出しをしようと思ったのですか？

A.最初は食事が作れなくなった人に食事を提供するだけと思って始めた事でした。ご飯を渡すのが「あつたかい!美味しそう!」と皆さん日に日に表情が和らぎました。そんな姿を見ているとお腹を満たす食事だけではなく、楽しさを提供しているんだなと感じました。中には私達の顔を見るだけでホッとするとおっしゃる方もいます。冷たいお弁当で食事をしていた住民さんにとって、手作りの温かい食べ物が本当に「有難い」、心の栄養になるんだなと感じました。

Q.炊き出しをするうえで大切にしていることはなんですか？
 A.現場で私が大切にしている事は、住民さんと仲良くさせてもらう事です。足りない物がないか、困った事がないか聞いています。一人一人に信用してもらい、楽しくお話ししたり、不足した物を補う事で少しでも前向きに考えてもらえるように気をつけています。

Q.子どもたちにメッセージをお願いします。

A.元気な子どもたちを見るだけで住民さんも私たち支援者も本当に明るい気持ちになり元気をもらえます! ちょっとずつの力でも、より集めたら大きな助けになります。皆さんの元気な顔を見せにぜひ被災地へ来てください!



地域に住む人の思いを形にするのって、ボランティアなんだよ!

地域のみなさんの
ありがとうの思いを
私たちが代りに温かい
スープにしてお届けして
いるんです!

東小学校4年1組では、「困っている人の役に立ちたい」と実行委員会をつくり、台風第19号災害で被災した長野市穂保地区を訪問し、ボランティアの人に「バターナッツのスープ」をふるまいました。

また、訪問前には地域でとれたカボチャの売上金を台風第19号災害義援金として日本赤十字社に寄付しました。

スープの炊き出しをやってみて

- スープをもらって嬉しい顔を思い浮かべて作りました。
- 自分が疲れて帰ってきたときに笑顔だと嬉しいから、笑顔を大切にしました。
- 「がんばってください。」よりも、「お疲れさま。」と言う様に心がけました。



ボランティア活動をした感想

- 言葉で考えているよりも、実際に実行することがどれだけ大事かを考えさせられた。
- ボランティアの人ばかり「ありがとう。」と言われて本当に嬉しかった。
- 被災地がたいへんひどかったため、ショックを受けましたが、ボランティアの方の役に立ててよかったです。
- もし、これからも災害があったら、どこの県でも助けにいきたく感じました。



ボランティアの人たちに感謝を込めて応援のメッセージカードも配りました。

